

## 時代の眼

# 戦争と保障と

庭 田 範 秋

一時期流行った唯物弁証法なる論理も、このところ少しく色褪せた感がある。なにせ唯物史観と唯物弁証法で歴史が捉えられ、社会が組まれた社会主義国・共産主義国が経済的に左前となってしまい、政治的に崩壊の危機にあるから、学理もどうにも冴えないのである。しかしそのような現実的状况を別にして、単なる学問としてのみ分析・追究してみると、それなりに興味を引かれるところが多い。とりわけ〈正一反一合〉の手順で、今ある状態が是認されつつ徐々に矛盾が増大し、そこに相反する勢力・状況が発生しながらそれが強化拡大を続けて、遂に今あるものが否定されるに至り、崩壊をやむなくされながら新体制・新状況・新時代が誕生をみるに至る。その“新”なるものは、今ある要素とその否定の要素とのミックスされ、融和され、一体となったものとしての新である。よってこの新を“合”で表わす。

社会保障でいうところの“保障”とは、保護して危害がないようにすること、または安全をうけあうことなどを意味するが、この社会保障制度なるものがなんと戦争と決して無関係にはありえなかった、戦争を無視してはその歴史が語れないというところに、世の不思議さや皮肉さがあるのである。まずその場所場所・その時時の権力構造による社会の安全・安定があって、そこに最大の混乱・破壊としての戦争が生じ、これを克服した段階でより高次元の安全・安定としての社会保障体制と福祉国家が登場してくるのである。まさに社会の場における唯物弁証法ではなかろうか。そのいくつかを取り上げて、分析してみよう。

①世界政治史上で特記されるに足るビスマルクは仇敵フランスを破るために、世に鉄血政策なる軍備拡張を強行した。そのための財源を豊かにするため重税を人民に課し、労働者を搾りに搾った。その結果、国内には過激思想が蔓延し、さらにせっかく軍備が整ったものの、それを使って具体的に戦争を遂行する壮丁・青年の健康破壊が著しく、体力低下が目についたので、そこで登場してきた一連の政策が“鞭と飴”のそれであって、一方では社会主義や破壊活動を弾圧しながら、他方では一連の社会保険を強制して、最後にフランスとの戦争に勝ったのであった。これぞ政治的〈正一

反一合〉を实践したものである。

②これまた世界政治史上で不滅の地位にあるチャーチルは、第二次世界大戦の末期にベバリッジをチーフとする委員会設置、そしてベバリッジ報告書を提出させ、それをもとに社会保障の实践を開始したのであるが、その狙いとするところは、イギリスはかつて第一次世界大戦でドイツに勝ちながら、世界ともども戦後処理の施策を誤まり、結局は大恐慌を経て第二次世界大戦にまたまた突入してしまったのである。今度こそ大戦に勝った暁には、社会保障政策を中心に据えた福祉政策を遂行して国民生活の安定を図り、所得再分配による有効需要の喚起、そして完全雇用の達成と社会経済の安定的発展を期したのである。希望どおりとまではいかなかったものの、とにかくにも国民は生活を楽しんでいる。戦勝—混乱—戦争—安定生活—そして今やまさに老大国的衰退との歩み。そこに〈正—反—合〉が具現されているとしても、あながち間違いとはなるまい。

③現代のアメリカは、依然として自由市場経済と自己責任の社会・国家の体質を保持し続けていて、国営・公的な社会保障はその水準と範囲において、文明・先進の国々にあって少しく見劣りがしよう。人々は働けるだけは働いて、または退職しても老後が食えるだけの蓄積・準備ができ上がればさっさと引退するであろう。体力・技能において低下すれば即失業・即引退とはなりかねないものの、公式には老齢年金支給開始年齢はこのところ67歳、かつてでも決して早いものではなかった。というのも、第二次世界大戦以後ごく最近まで世界の警察官・警備隊・エリオットネスを気取って、常に臨戦体制を組み続け、一旦緩急あれば義勇公に報ずるため、若・壯年層が大量に戦地に出征するから、その留守を守って生産活動に従事させるためにも定年年齢を引き伸ばし、高齢者に働く習慣を付けさせるべく年金支給開始年齢の遅らせでもあったのである。ここにも戦争が影を落とし、やはり〈正—反—合〉の図式がある。

④わが日本国でも社会保障はその歴史で戦争の尾を付けている。それは公的年金が軍人対象で始められたことでも分かる。社会保障がそれぞれの時代で戦費調達に利用されたり、戦時経済下のインフレ抑止に利用されたりしたのであった。そして本来の国民生活の維持安定の本質を思う時、やはり〈正—反—合〉の変転を否定しきれないであろう。

(にわた・のりあき 慶応義塾大学名誉教授)